

# 花を求めて

世界の植物園の中心的存在である英国王立キュー植物園で高山植物を学ぶため一年間留学をしたのは一九七二年。そこで栽培や発芽適温調査を行った植物のひとつにメコノプシス「青いケシの仲間」があった。

日本では一九九〇年に大阪で開催された「国際花と緑の博覧会」で一躍有名になり、現在も咲くやこの花館では周年開花に努めている。この博覧会まではヒマラヤ登山家などが目にして「幻の花」に近かった。

留学を終える頃、同時期に留学をしていたヒマラヤの友を訪ねるユーラシア横断の旅を計画した。

中古キャンパーでまず目指したのはスコットランドのベティ・シェリフさん。彼女はご主人で植物学者のジョージさんと共にシツキム、ブータン、チベットでの植物調査を行い、ヒマラヤの植物を一九三七年からイギリスで広められた第一人者であった。ジョージさんはブータンシボリアゲハの発見者でもあった。こんな夫妻の庭はブータン奥地の青いケシの仲間が咲き乱れ、夢のような世界であり、現地に向かうプレリユードと思えた。

その後、北欧、中欧、南欧、アジアに入りトルコ、イラン、アフガニスタンのヒンドウクシユ、パキスタン、カシミール、インド、ネパール、シツキムへと向かった。ネパールの王立ゴダヴァリ植物園を訪ねると、キュー植物園所属のグレイ・ウィルソンさんがランドローバーに植物標本を満載にしてイギリスに戻る

## 久山 敦

プロフィール  
1947年兵庫県生まれ。大阪市・咲くやこの花館館長。関西学院大学英文科卒業。英国王立キュー植物園留学を経て、淡路ファームパークの設計・管理を担当。1990年の国際花と緑の博覧会計画時より、咲くやこの花館の運営に携わる。野草探索のために訪れた国、51カ国。著書に『ヨーロッパ花の旅』（創文社）『ヒマラヤの青いケシ』（東方出版）など。

とところに遭遇した。今では青いケシ分類の頂点に立つ専門家である。

また、シツキムに近いカリンポンではランの研究家ウダイ・プラダさん宅を基地にヒマラヤ山中を訪れた。青いケシの仲間が高さが二メートルにもなるメコノプシス・ナパウレンシスが、一〇月というのに黄色の花を残し、プリムラ・カピタータは良い香りの紫の花で迎えてくれた。

東方を目指すのが、当時のビルマは通行困難な故にカルカッタ（現在コルカタ）で車を神戸に向かう船に積む。二万四〇〇〇キロを無事通過してきた。

この半年に及ぶ陸路の旅で、点ではなく線で植物を観察できたのはその後の三つの植物園の立ち上げや管理に大層役立ち人生をも変えた。また四〇数年を経て、カリンポンの友からはウコンユリなどヒマラヤの植物が届き、咲くやこの花館で入館者に見て頂ける繋がりも有り難い。

そして、欧州から東洋、日本を目指すすと、植物が次第に日本に近づいているのを知らせてくれる。五感に訴えるものが故郷の近いことを教えてくれ、何物にも代え難い喜びと安心感を覚えたものである。

今一度その道をたどって植物調査を緑で行いたいのが、以前以上に危険で難しい地域が含まれ、頭を過るのはその地の人たちのこと、一刻も早く平和な環境になることを祈りたい。

## 月刊 みんなぱく

3月号目次

- |   |   |
|---|---|
| <p>1 エッセイ 千字文<br/>花を求めて<br/>久山 敦</p> <p><b>特集 アートの境界</b></p> <p>2 アートの境界面としての美術館<br/>水沢 勉</p> <p>4 ふたつの「用」の向こうに<br/>鞍田 崇</p> <p>5 わたしはアーティスト<br/>緒方 しらべ</p> <p>7 植物画の境界<br/>村山 誠</p> <p>9 ファッションとアートをめぐる問い<br/>蘆田 裕史</p> <p>10 〇〇してみました世界のフィールド<br/>「ケンカ」のすすめ<br/>朝倉 敏夫</p> <p>12 みんなぱく Information</p> | <p>14 味の根っこ<br/>サンバル<br/>杉本 良男</p> <p>16 文化遺産おもてうら<br/>文化遺産の「拡張」<br/>——サンティアゴ巡礼路に描かれた矢印<br/>土井 清美</p> <p>18 音の居場所<br/>孤高の歌姫<br/>——トルコのアレヴィーとして<br/>米山 知子</p> <p>20 人間学のキーワード<br/>グローバルヘルス<br/>浜田 明範</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|---|---|